

影

四年 ひ な 子

あづさゆみ春日の落す木々の葉の影や、ゆれて
風かをり來る
木々の影木々をどひかふ鳥の影ほどよく窓にうつる朝かな
やはらかき春日の落す木の影を心かろく今日もふむかな
てまりつく妹の影のありくくと障子にうつり歌聲のする
日だまりに影ふみをして遊ぶ子のとよめき聞ゆのごなるひる
木々の影ものゝ影みなうすれゆく夕はさびし鳥のなくさへ
春の夜のまちのほかげをなつかしみたゞ何となくいでて來しかな
その昔よくせしあそび影ふみの思ひ出らるゝよき月夜かな
うすながく引ける我影ものゝ影消えて靜に日は暮れにけり

三年 せ つ 子

花の中につとゝび入りし紫のこころは夢の我なりしかな
紫の山につゞきてはつなつの緑ののべのうちひろされる
初夏の光かゞやく朝の空わがかなしびにかゝはりもなし
静けさにうちひたらんと夕まぐれ緑の岡に一人のほりぬ
風もなく雲も動かぬ静けさのまなかに立ちて春の山見る
満ち足ぬといふ事しらぬ此頃の我のこゝろのやませなきかも
かなしびといふ事知らぬ者のごと君笑み給ふ春の夕ぐれ
わが歩む麓の道と君あゆむみねの道とはいづれまされり
いと遠きものと思ひし光明の世を今我の歩みつゝあり

五月雨

さみだれにぬれし若葉の色見ればたゞ何となくものゝこひしき
しみくくと物思ひするわが身にはさみだれ時ぞうれしかりける
しめやかにふるきことなど語りあふ五月雨頃の夜の静けさ
さみだれの夜の寂しさもわすれけりとなりの家の三味の音よきに
歌につかれ文にもうみてたゞ人のこひしかりけり五月雨の夜は
つゆばれの夕の丘べあかき灯の町をみおろし涙するかな
しめりたる土の香をかぎつゆばれの林をゆけば心たのしも
つゆはれの空を仰ぎぬしみくくと嬉しき人にあふ心地して

江の島と鎌倉

二年 C T 子

誰ぞ來り扉をひらけいにしへの右の大臣に涙たむけむ(實朝の墓にて)
黒がみを梳く手とどめてするくくと昇る陽を見る江の島の宿
江の島の島回の波の水色のきぬのべしごとひかる初夏
極樂寺電車下るれば初夏の日は青葉なす坂の上
に照る
鶴ヶ岡八幡宮のみやしるに鳩もひそみて夕となりぬ

初夏

二年 き み 子

少女子の輕き袂に風かほり光あかるき學びやの庭
桐の花音なく落ちて黄昏るゝ故郷の夏のにほいうれしも